

富屋地区の歴史については、地区内に15か所の縄文時代遺跡が確認されていることから、既に数千年前には先住民が居住していたと考えられる。徳次郎六か郷の鎮守である智賀都神社は、奈良時代後期の宝亀9年、久次良一族によって日光山から御霊を勧請したと伝えられる。

鎌倉時代には宇都宮の3代城主朝綱の旗下、新田信濃守義盛が住み領内を治めた。南北朝時代には門前地内に、妙哲禅師によって護鷹山伝法寺が開山し、室町時代頃には守勝を始めとする徳次郎の刀工たちが、当地で名刀を打った。下って戦国乱世の時代に、連歌師の柴屋軒宗長が日光の帰路、横倉で休息をとり一句詠んだ。天正年間には新田徳次郎昌言が、徳次郎城に居城した。

江戸時代に入ると、日光街道の開通によって上、中、下の3つの徳次郎宿が設けられ、宿場は日光社参の人々で賑わった。江戸時代末期には、徳次郎6か郷で絢爛豪華な彫刻屋台が建造され、また、この時代二宮尊徳の指導によって、徳次郎六郷用水、新堀・宝木用水、上下金井用水の3つの用水路が改修、整備された。

明治時代には、国の近代化政策によって新たな施設が整備された。明治5年から20年にかけて、中徳次郎郵便取扱所、明德舎（後の富屋小学校）、交番所（後の駐在所）が設置された。次いで明治22年には徳次郎村と近隣の5か村が合併し、富屋村が誕生した。なお、富屋の地名は、中国の儒教の古書「大学」の一節『富潤屋、徳潤身、心廣體胖』に由来するものである。

明治後期になると、人車鉄道富屋線が戸祭・徳次郎間を運行し、乗合馬車も徳次郎・清住町間を往復した。しかし、大正時代には乗合自動車が出現し、宇都宮市内と徳次郎間を運行し始めた。

終戦後の昭和22年には富屋中学校が開校し、続いて昭和24年に富屋公民館が開館となった。その後、昭和29年に富屋村は宇都宮市に合併し、同年、富屋支所（後の出張所）が設けられた。

昭和40年代には東北自動車道が、昭和50年代には日光宇都宮道路が開通した。昭和42年からは市営山王住宅団地の整備が進められ、540戸が建設された。昭和60年からは田川の流域を中心に大規模な水田のは場整備と河川改修が行われた。平成9年、富屋地区市民センターが新たに開所し、出張所と公民館を併せ持つ利便性の高い施設が誕生した。



智賀都神社



護鷹山伝法寺



徳次郎城跡



旧富屋村役場